

「聴く力」と「感受する力」から幼児の感性を探る試み —楽曲聴取調査による印象と感動の評価からの一検討—

北村 幸子

本研究は、幼児の豊かな感性と表現力を養うためには、幼児の「聴く力」と「感受する力」を育てることが重要な要素となるという観点から音楽聴取調査を行い、幼児の感性のありようの具体化と、幼児期における音楽鑑賞の有用性を明らかにすることを目的とした。幼児用の音楽の印象評価尺度と感動評価尺度、さらに幼児用の音楽の印象評価回答シートと感動評価回答シートを作成し、幼児14名を対象として行った2曲の楽曲聴取調査の結果からは、幼児が楽曲の曲想を幼児なりに捉え、それぞれが喜びや興奮、驚きといった感性で心を動かされていることが示された。

キーワード：幼児、感性、音楽聴取、感動評価尺度、聴く力

This work aims to concretely understand character of Kansei and to explore validity of music listening of young children based on a viewpoint that developing their listening and sensitivity abilities are important for cultivating rich Kansei and expression ability of young children. For this purpose, Music impression evaluation scale and Kandoh evaluation scale for young children were invented and music listening experiment for 14 five- and six-year-old children was conducted. The results show that each of the children recognized the various musical themes that they listened and was impressed by the music with his/her Kansei of pleasure, excitement, surprise, and so on.

Key words : Young children, Kansei, Music listening, Kandoh evaluation scale, Ability of listening

I. 問題と目的

2018年施行の幼稚園教育要領の中で、感性と表現に関する領域「表現」のねらいの冒頭においては、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」¹⁾と述べられており、この項目では感性という言葉が頻出している。時代の流れとともに幼児を取り巻く環境はめまぐるしく変化しているが、そこに順応し、先をも見据えながら、幼児が豊かな感性を育み、小・中学校へと進んでいけるよう、我々はこの「感性」という重要なキーワードと常に対峙し、取り組んでいかなければならない。

「感性」は誰もが必ず有し、豊かに生きていく中では極めて重要なものである。毎日の生活を新鮮に感じ、不思議な発見や出会いにあふれている幼

児たちには、「感性」は彼らの表現手段や表現の方向性を決定する上での大きなよりどころとなっているに違いない。

しかし音楽表現活動において、いかに幼児の「感性」を育むかについては議論がされるものの、幼児の「感性」がいかにあるかを明確にしようとしている研究は少ないように思われる。そこには幼児の言語能力、表現能力、感情理解能力、音楽的な概念や音楽的語法の理解等種々の問題があると考えられるが、音楽表現活動のあり方を論考する上でも、音楽表現活動における幼児の感性のありようを探る研究は進められるべきものであろう。

鈴木は、「幼児期において『豊かな感性』が発揮される仕組みは、対象を受け止め、自身のなかで構想し、外部に出力するという3側面が相即して還流する状態」と述べているが²⁾、このうち1つ目の「対象を受け止める」とは、音楽表現活動に

おいては聴く、そして感受する行為である。即ち、「聴く力」と「感受する力」を育てることは、豊かな感性を養う上では非常に重要な要素となると言えるであろう。

「聴く力」の基礎となる音楽の知覚能力に関する先行研究を言語能力、感情理解能力も含めて概観すると、人間は胎児期より母親の心音や声を聴き分けており、生後12ヶ月までに3音、もしくは4音からなるリズムパターンの変化に気づき³⁾、旋律のテンポの変化にも生理レベルで反応することが確認されている⁴⁾。また長い楽曲の中に含まれる一部の旋律を取り出して覚えることができ⁵⁾、旋律の長調、短調の違いに気づくようになるという⁶⁾。3～4歳になると音楽に対する、喜び、悲しみ、怒り、満足といった感情の特定が可能になり⁷⁾、音の高低や音の強弱の弁別能力は、4歳から5歳を移行期として著しく発達する⁸⁾。5歳児では、「明るい」「暗い」といったおおよその類別にとどまらず、それぞれの調による特徴の違いを言葉で感情表現して説明したりもする⁹⁾。5～6歳では、2～4音からなるリズムパターンをほぼ全員が正確に同期でき、幼児期はリズム知覚が伸びる時期だとされている¹⁰⁾。

そして、特に次の2点の理由から幼児期の日常生活に音楽鑑賞の時間を取り入れることの有用性に考え至る。

我々は、日々数えきれない種類の音に囲まれて生きている。好むと好まざるに関わらず、否応なしに毎日音を受容している。音楽は、日常生活の中では趣向性の強い人以外にはどちらかというところを何かをしながら聴くか、勝手に耳に入ってくるもので、意識して聴こうとするものではなくてきているように思われる。

「現代を生きる幼児は、聞くこと（自然に耳に入ってくること）は日常生活の中で多く経験していても、聴くこと（意識して耳を傾けること）はあまり経験していないように見受けられる」¹¹⁾との指摘もあるが、聴きたいものや聴かせたいものを“集中して”また“意識的に”一定時間聴こうとする活動をより積極的に取り入れることは、特に音楽の知覚能力が発達する乳幼児期には重要なものであり、こうした活動の積み重ねが音楽をより深く

自由に味わって「聴く力」と「感受する力」を養っていくことになるのではないかと考えられる。「耳を傾けた状態であるからこそ、音の刺激は幼児の心に響いて入っていくものと推察される」とZeeは述べている¹²⁾。

また、「小学校学習指導要領・音楽科」¹³⁾の内容は、「A表現」、「B鑑賞」及び「共通事項」で構成されており、「鑑賞」は独立した領域として掲げられている。1年生の音楽の教科書¹⁴⁾には「鑑賞の学習」として鑑賞用の曲が7曲挙げられ、授業の中で鑑賞の時間が設けられるように考えられている。「幼稚園教育要領」では、小学校教育との接続に当たっての留意事項として学校教育との一貫性が述べられていることから¹⁵⁾、幼児期においても音楽鑑賞の時間を積極的に取り入れ、豊かな感性が発揮される「聴く力」と「感受する力」を育み、学童期での音楽の学習へとつなげていければよいであろう。

本論は、その後の学校教育につながる豊かな感性を養うためには、音楽の知覚能力の発達が見られる幼児期に「聴く力」と「感受する力」を育てることが重要な一要素になるという視点に立ち、幼児14名に対する音楽聴取調査から幼児の感性のありようについて検討するとともに、幼児期における音楽鑑賞の有用性について考察することを目的とする。調査対象者のリズムと旋律の知覚能力を確認する予備的な調査の結果についても簡単に述べる。

なお、「感性」は1990年代から工学系領域での研究が進み、「感性情報処理」という新しい分野の研究が発展してきた。それ以降「感性」という言葉の定義はさらに奥行きを広げ、各分野でそれぞれ多義的である。本研究で考察する感性についての定義は原田¹⁶⁾を参考に、「感受性」、「感情」、「感動」、「気持ち」、「感じ方」等を感性を意味する言葉と捉え、考察を進める。

II. 方法

1. 調査対象者と倫理的配慮事項

大阪府内の公立及び私立幼稚園に通う園児14名（年中男児1名、年中女児2名、年長男児8名、年

長女児3名)である。調査対象者の保護者には予め調査目的や調査内容と方法を書面や口頭で説明し、承諾を得てから行った。また個人のプライバシー保護と、幼児が調査中に周囲からの影響を受けることを考慮し、調査は個別に行った。1人あたりの調査時間は、予備的な調査を合わせて30分程度で、適度に休息をとりながら進めた。

2. 調査時期

2019年10月27日～11月10日

3. 幼児の音楽知覚能力に関する予備的な調査

音楽聴取調査に入る前に、今回の調査対象者である幼児の音楽知覚能力が従来の研究結果と一致するものであるかを確認するため、また初対面で緊張しがちな気持ちをほぐす意味もあり、調査の導入としてリズムと旋律の知覚に関する調査を行った。ここで使用する調査素材には、音楽聴取調査で使用する楽曲のリズムと旋律を含み、幼児にとって調査の予備知識となることも期待した。

(1) 調査方法

(A) リズムの知覚に関する調査

筆者が手打ちしたリズム4パターン(①、②、③、④)を真似してもらい、同期が可能であるかを確認する。尚、③④は音楽聴取調査で使用する楽曲ⅠとⅡの曲中に使われているリズムパターンである。

(B) 旋律の知覚に関する調査

筆者がピアノで弾きながらドレミか、ラララで視唱した旋律⑤⑥の模唱は可能かどうかを確認する。この2つは、音楽聴取調査で使用する楽曲ⅠとⅡの旋律であり、リズムパターン③④が旋律と

なったものである。

それぞれの課題に対して上記で述べた方法で3回までは繰り返し行い、これを正答とした。

(2) 結果と分析

(A)①②③④(B)⑤⑥の各調査結果を表1に示す。初対面の緊張と恥ずかしさから参加できなかった1名を除き、13名での調査結果として集計している。

4音と5音からなるリズムパターン①②の正答率は100%となった。③④に関しては、拍子感の未熟さのために四分音符が4～5回続くところや、タイや付点の手打ちの後にリズムの知覚を失い、正答率が下がったと考えられるが、筆者が強拍を強調して手打ちをしたり、「いち、に、さん、し、」と声でカウントしたりすると、同期が可能になる幼児が増えた。また、ピアノやリトミックなどに通う音楽経験者とそうでない幼児の正答率には明らかな差が見られた。

⑤⑥は③④のリズムに旋律(音の高さ)が付加されたものであるが、ピアノ等の音楽に関する習い事をして、日頃からリズムを知覚することを経験している幼児は、リズムを知覚する③④の方が旋律を知覚する⑤⑥よりも正答率が高くなっている。これは、特にリズムに特化した学習をしているリトミック経験者に見られた傾向である。一方未経験者は、③よりも⑤の方が高い正答率を示している。これは、幼児に限らず人は一般に、旋律を聴く時に、音を個別に認識するのではなく、旋律の輪郭線やパターンを塊(フレーズ)として認識し、知覚する傾向にあるためと考えられる(ゲシュタルト 群化の法則)。

4. 音楽聴取調査

(1) 調査に使用した曲

幼児の集中力の持続性、嗜好性、楽曲の明瞭性等を考慮し、聴取してもらう曲は次の2曲で、演奏時間はいずれも2分30秒以内とした。

[楽曲Ⅰ] シンコベアテッドクロック(ルロイ・アンダーソン作曲)

1945年に作曲された曲である。常に規則的に時を刻むはずの時計だが、シンコベーションのリズムによって正規的な進行を乱されるところや、目

表1 リズムと旋律の知覚に関する調査結果

		経験者正答率	未経験者正答率	全体正答率
①		100%	100%	100%
②		100%	100%	100%
③		100%	50%	69%
④		80%	50%	62%
⑤		80%	75%	77%
⑥		60%	50%	54%

表2 幼児のための音楽の印象評価尺度

高揚	あかるい、たのしい
親和	やさしい
強さ	つよい、はげしい
軽さ	かるい、ころころかわる
荘重	えらいかんじ、きちんとした
抑鬱	くらい、かなしい

表3 幼児のための感動評価尺度

3分類クラス	7分類クラス	
受容的	充溢	いいなあ
	享受	なんかよい さびしい
表出的 (正の感情)	魅了	きれいだなあ
	興奮	うわあ、すごい
	歓喜	わーい！ うれしい やったあ！
表出的 (負・中立の感情)	悲痛	ないちゃう かなしい ショック！
	覚醒	ドキドキする びっくりした

ざましのベルが鳴る中間部、時計が壊れてしまうエンディングなどストーリー性があり理解しやすい。また題材が日頃の生活の中にある時計であることや、身近にあるウッドブロックやトライアングル等の楽器がユーモラスに使用されていることから、幼児には楽しめる曲である。小学1年の音楽の教科書¹⁷⁾で鑑賞用の曲として掲載されている。[楽曲Ⅱ] 組曲「動物の謝肉祭」から『序奏と獅子王の行進』（サン＝サーンス作曲）

1886年の作品。14曲の小品からなる組曲で、わかりやすく、親しみやすいことから乳幼児のためのコンサートにも頻出する曲である。耳をつんざくような衝撃的な冒頭から始まり、百獣の王ライオンがあくびをしながら目覚め、ピアノでのファンファーレの模倣の後に弦楽器によってライオンが勇壮に威厳をもって行進する場面が描かれている。幼児が想像を膨らませて楽しめる曲であると想定する。

(2) 音楽の印象評価尺度/感動評価尺度と音楽の印象評価回答シート/感動評価回答シート

幼児の感情評価尺度の選定や開発では、表情のイラストや写真を用いた選択課題がよく用いられるが^{18) 19) 20) 21)}、選択肢が4種類程度に限られることが多い。幼児の感性を具体化しようとするにあたり少しでも幼児の選択肢の幅を広げるため、本研究の音楽聴取調査では、大出らの感情価測定尺度及び感動評価尺度²²⁾を基にして、幼児にも理解できそうな言葉だけを選択し、表2、表3のように6分類による幼児のための音楽の印象評価尺度と、3分類と7分類による幼児のための感動評価尺度を作成した。また、図1に示す、曲に関する印象を答えるための幼児のための音楽の印象評価回答シートと、図2に示す、幼児のための感動評価回答シートを作成した。2種の回答シートと個別の会話をもとに評価を行うこととする。

(3) 調査方法

楽曲ⅠとⅡをこの順に用いて調査を行った。これは、楽曲Ⅰの方が楽曲Ⅱに比べて曲想が穏やかで幼児にとって受け入れやすく、緊張しがちな調査対象者が聴く最初の楽曲として適切と判断したためである。各楽曲に対して次の手順を繰り返して調査を行った。

1. 個々の調査対象者が他の対象者の言葉等に惑わされることのないよう、聴取調査は1人ずつ行う。
2. 楽曲を聴取する前には、幼児が容易に曲の世界に入り、イメージを膨らませ、豊かな感性が導き出されるように、楽曲Ⅰでは画像²³⁾と楽曲Ⅱでは動物園のライオンのあくびと歩いている様子の写真²⁴⁾を見せ、各場面の情景や登場する楽器について説明する。
3. 楽曲を聴取してもらう。楽曲は、オーソドックスな演奏方法と編成のものをインターネット上^{25) 26)}からダウンロードし、スマートフォンからBluetoothを介してBose社製スピーカーRevolve Sound Linkで同一音量で聴いてもらう。調査対象者には自由に柔軟に感じてもらうことが理想であるので、できるだけリラックスして聴取してもらうように言葉がけや雰囲気づくりには配慮する。

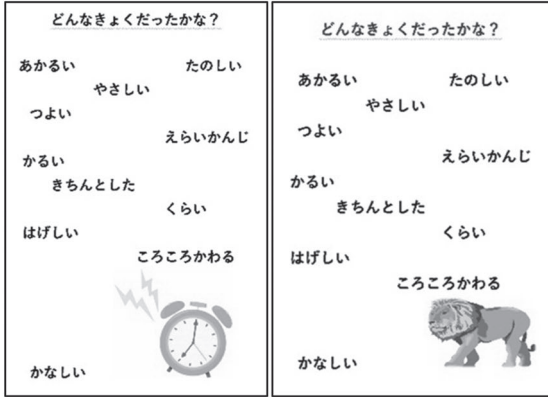


図1 幼児のための印象評価回答シート

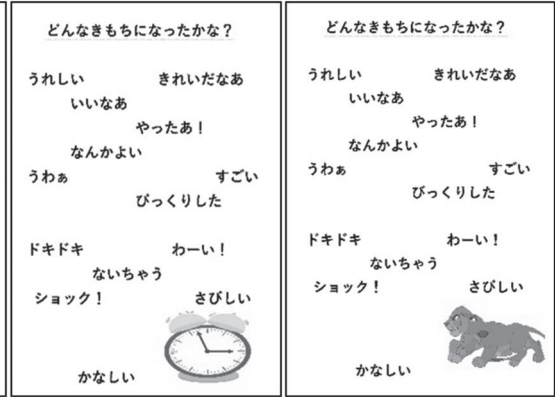


図2 幼児のための感動評価回答シート

4. 1曲の聴取が終わるごとに、聴取した音楽がどんな曲だったのかを聞かせてもらい、その後、音楽の印象評価回答シートを示し、書かれている言葉の意味を理解できているかを確認しながら一つずつ読み上げ、感じた言葉の箇所にシールを貼っていく。より強く感じる言葉には最大3枚のシールを貼り、何も感じない言葉にはシールを貼らない。シールは複数の言葉に貼ってもよいとする。続けて、どんな気持ちになったのかを感動評価回答シートに同様の手順でシールを貼っていく。
5. 曲間には5分程度の休憩を入れる（状況に応じて、ラムネやチョコレート等の少量のおやつも与える）。

1. 楽曲の印象評価—幼児は聴取した曲をどのような曲と捉えているのか

ここではシールが貼られた言葉をそれぞれ1点として、表4に示した幼児のための音楽の印象評価尺度に集計した。但し、過度に興奮し、楽曲Ⅰの課題に集中できていない様子だった1名は集計から除外している。

表4に示すように、聴取した楽曲Ⅰのシンコペテッドクロックでは「高揚」の印象を、楽曲Ⅱのライオンの大行進では「強さ」の印象を持った幼児が圧倒的に多い。その他には楽曲Ⅰでは、「きちんとした」を選んだ幼児が多く、ウッドブロックで時計のように規則正しく刻まれる拍を「きちんとした」と捉えたと思われる。

楽曲Ⅱにおいて「えらいかんじ」を選んだ幼児

Ⅲ. 結果と考察

幼児のための音楽の印象評価回答シート及び感動評価回答シートで得られた評価結果を、①どのような音楽と捉えているのか、②どのような心の動きがあるのか、③どの程度の心の動きがあるのか、④①②に関連性はあるのか、⑤個々の感じ方はどのようにあるのか、の5つの観点から考察することにより、幼児が聴取した音楽から感受したものの質や量を推し量り、幼児の感性のありようを具体化することを試みる。また、幼児期における音楽鑑賞が、幼児の豊かな感性を養うための有効な取り組みの一つとなり得るかどうかについても考察する。

表4 幼児のための音楽の印象評価尺度による評価結果

音楽の印象評価尺度		楽曲Ⅰ		楽曲Ⅱ	
高揚	あかるい	6		4	
	たのしい	8	14	6	10
親和	やさしい	5	5	4	4
強さ	つよい	0		12	
	はげしい	0	0	5	17
軽さ	かるい	3		1	
	ころころかわる	4	7	3	4
荘重	えらいかんじ	3		4	
	きちんとした	5	8	4	8
抑鬱	くらい	0		2	
	かなしい	0	0	0	2

「聴く力」と「感受する力」から幼児の感性を探る試み

は、百獣の王ライオンが威厳をもって歩く様子を曲のメロディからつかみ取っていると思われる。ライオンを表現するメロディの下では、行進を表現する同じリズムパターンが繰り返されているが、それを「きちんとした」と感じていると考えられる。

また、「くらい」を選んだ幼児がいたが、弦楽器が奏でるライオンの行進のメロディが短調であることを理解していた（幼児のコメントより）。

「やさしい」を選んだ幼児は、中間部ではライオンの行進のメロディが高音域で奏でられており、それを「やさしい」と感じている（「ライオンの赤ちゃん」と言った幼児のコメントより）。両曲ともに「ころころ変わる」を選んでいるのは、曲中で楽器が変わり、曲想にも変化があることを理解したものと思われる。

「軽さ」と「強さ」の言葉の選び方には明らかな差があり、幼児たちが2曲の曲想の違いをしっかりと感じていることが示されている。このように調査調査対象者は、聴取したそれぞれの曲を幼児なりによく分析して、曲の性格や曲中の変化を理解していることがわかる。

2. どのような心の動きがあるのか

幼児のための感動評価尺度による評価結果を表5に示す。シールが貼られた言葉をそれぞれ1点として集計している。

楽曲Ⅰでは、幼児たちは「興奮」や「歓喜」の感動を強く抱いたことがわかる。この楽曲の中間部で目ざまし時計が鳴る場面があるが、トライアングルがこれを受け持つ。トライアングルは幼児たちには馴染みの楽器で、この場面を楽しかったと話す幼児が多かった。また、自分たちの普段の鳴らし方とは異なり、トライアングルを連打する手法にも驚きや興奮の反応を示した。目ざまし時計が鳴るシーンでは一緒に鳴らす真似をする幼児もいた。曲の最後の部分では、スライドホイッスルの音が加わり、ここでも驚きと嬉しそうな表情を見せた幼児が多かった。

「充溢」や「享受」、「魅了」に属する言葉を選んでいる幼児がいるが、楽曲の主要部分では、時折シンコペーションでリズムがコミカルに動いたり

表5 幼児のための感動評価尺度による評価結果

感動評価尺度 (3分類)	7分類		楽曲Ⅰ		楽曲Ⅱ	
受容的	充溢	いいなあ	5	5	2	2
	享受	なんかよい さびしい	4 1	5	3 0	3
表出的 (正の感情)	魅了	きれいだなあ	5	5	2	2
	興奮	うわあ すごい	2 8	10	3 8	11
	歓喜	わーい うれしい やったあ!	2 7 0	9	1 6 3	10
表出的 (負・中立の感情)	悲痛	ないちゃう かなしい ショック	1 0 2	3	2 0 2	4
	覚醒	ドキドキする びっくりした	2 5	7	6 9	15

しながらウッドブロックが規則正しく拍を刻むという穏やかな曲の流れを感受していると考えられる。

楽曲Ⅱでも「興奮」や「歓喜」に属する言葉を選んだ幼児が多いが、それを上回って「覚醒」に属する言葉を選んだ幼児が多数いる。聴取中は、ピアノでのファンファーレや、弦楽器で演奏されるライオンの行進を象徴する旋律部分など、ドラマティックな曲想を終始飽きない様子で聴いていた。聴取後には「怖かった」「びっくりした」「たのしかった」「すごいおとだった」「かっこよかった」「すてきなきょくだった」「すごいはくりょくだった」「ドーンがいっぱいできてきた」「つよいかんじ」「おもしろい」など、感じたことを話す幼児が多数見られ、ライオンが寝ているところから起きて歩き出す真似をしてみたり、ピアノで低音部からユニゾンの半音階進行で奏される部分では、それをライオンの唸り声と捉え、一緒にガオーと吠える真似をしたりした。また、この聴取を行って以降、自宅や車の中で何度もこの曲のCDを聴きたがる幼児もいたと保護者からの報告を受けている。「ないちゃう」を選んだ幼児のうち1名は、怖いと言って実際に泣いた。

以上のような聴取後のコメントや様子と感動評価尺度による評価結果からは、幼児達がそれぞれ

の曲想をしっかりと感受していることがわかる。

次に、貼られたシールの総数をその言葉の点数（幼児一人当たり1～3枚）として加算集計した感動評価尺度（3分類）による評価結果を図3（a）に示す。

楽曲Ⅰでは、幼児の感動の種類は「表出的（正の感情）」に、楽曲Ⅱでは「表出的（正の感情）」と「表出的（負・中立の感情）」の方向に偏っていることがわかる。

一方、小学校高学年児童を対象に筆者が別途実施した同様の音楽聴取調査では、図3（b）に示すように得られた感動の種類は、バランスが良いものとなっている。幼児の感性は小学生に比べると、表出的な感動を感受する傾向があるように見える。但し今回の実験では、幼児が集中して楽曲を聴取できる時間を考慮して2曲のみの聴取となったことと、各選曲も幼児にとって理解しやすく、親しみやすいと推測される曲としたため、この結果だけでは判断はできない。今後は曲想の違う複数の楽曲の聴取調査をさらに進める必要がある。

3. どの程度の心の動きがあるのか

次に幼児の心の動きの量について考察する。

調査対象者14名が貼ったシールの数を表6に示す。2曲ともに1種類の数（1枚のみ、2枚のみ、3枚のみ）のシールを使用した幼児は5名であった。2曲ともに2種類あるいは3種類の数（1枚と2枚、1枚と3枚、2枚と3枚、1枚と2枚と3枚）のシールを使用した幼児は5名、2曲とも3種類のシールを使用した幼児はいなかった。この結果から、今回の調査方法では、感じた感動を言葉にして判別することはできても、選んだ言葉のそれぞれの感度の量の違いについて判別し数値化することは幼児にとっては難しいか、できる場合でも2値（多い/少ない）であると言えそうである。

また、両曲ともに各評価因子に使用したシールの数が1枚のみだった幼児は2名、両曲ともに一度でも3枚を使用した幼児は6名、どちらかの楽曲で1度でも3枚のシールを使用した幼児は11名である。少なくとも1評価因子に対して感動の量が多かったことを認めている幼児が多数いると考えられる。

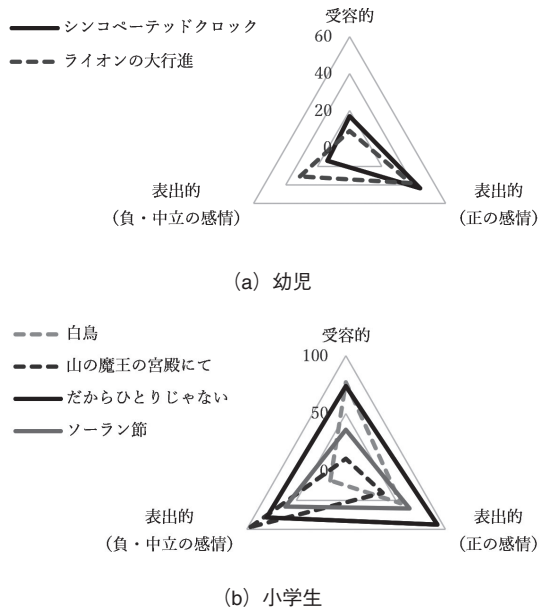


図3 感動評価尺度（3分類）の実験結果

4. どのような音楽と捉えた時にどのような心の動きがあるのか

次に、聴取した2曲の音楽の印象評価尺度による評価結果と感動評価尺度による評価結果の関連性から、幼児がどのような音楽と捉えた時にどのような感動が生じるのかを検討する。調査対象者が貼ったシールの枚数をすべて反映させた各楽曲の音楽の印象評価尺度による評価結果と感動評価尺度による評価結果を表7に示す。

両曲における音楽の印象評価尺度の「高揚」と、感動評価尺度の「興奮」、「歓喜」は高い数値を示し、これらは関連していると考えられる。

一方で「強さ」は、突出して高い数値を示す楽曲Ⅱでは「覚醒」と、低い数値を示す楽曲Ⅰでは「悲痛」と関連していると考えられる。また「抑鬱」は両曲ともに最低値を示しており、楽曲Ⅰでは「悲痛」との関連が考えられ、楽曲Ⅱでは「悲痛」や「充溢」など低い値を示す評価因子が複数あり、関連があると考えられる評価因子は多岐に渡る。

このように、幼児は「高揚」と評価した楽曲には共通して「興奮」や「歓喜」の感動を感受するが、それ以外では「強さ」や「抑鬱」のように、印象評価因子と感動評価因子の関係は必ずしも1対

「聴く力」と「感受する力」から幼児の感性を探る試み

表6 調査対象者が貼ったシールの数

1つの言葉に対する貼ったシール枚数	楽曲 I	楽曲 II
1枚のみ	No.2,8,10,14	No.2,3,8
2枚のみ	No.9	No.5,9
3枚のみ	No.5,12	No.11,12
1枚と2枚	No.11	
1枚と3枚	No.1,13	No.1,13,14
2枚と3枚	No.3,4,6	No.6,7
1枚と2枚と3枚	No.7	No.4,10

表7 評価尺度による評価結果

音楽の印象評価尺度	楽曲 I		楽曲 II	
	楽曲 I	楽曲 II	楽曲 I	楽曲 II
高揚	23	18	充溢 10	4
親和	11	6	享受 9	5
強さ	0	35	魅了 10	5
軽さ	10	11	興奮 16	19
荘重	13	20	歓喜 20	16
抑鬱	0	4	悲痛 3	6
			覚醒 12	30

1ではなく、ある印象の楽曲に対してどのように感動を感受するかは、楽曲によって異なる。

5. 個々の感じ方はどのようにあるのか

14名の各調査対象者が、各楽曲に対して選んだ言葉と貼ったシールの数を表8と9に示す。選んだ言葉の数の平均は楽曲Iで3.1(標準偏差1.5)、楽曲IIで3.4(標準偏差2.1)、貼ったシールの数の平均は楽曲Iで5.7枚(標準偏差3.4)、楽曲IIで5.9枚(標準偏差3.4)であった。

No.5の幼児は両曲ともに選んだ言葉の数が1ずつで最も少ないが、いずれにも3枚と2枚のシールを貼っている。No.11とNo.12の幼児も選んだ言葉の数は1~2と少ないが、3枚のシールを貼っている言葉が多く含まれている。これら3名が感じた感動の種類は1~2種類と少なかったかもしれないが、感じたものの量は彼らにとって最大か、またはそれに近いものであったと言えるのかもしれない。

No.1, 2, 7, 8, 13の幼児はいずれの曲でも4~6個の言葉を選んでおり、多様な感じ方をしている。

しかし、No.2とNo.8の児童は多種の言葉を選んでいるものの貼ったシールの数はすべて1枚で、それぞれの感じ方の量の違いについては自分では判別していない。

No.7の幼児は、選んだ言葉の数も貼ったシールの数も他の幼児と比べ群を抜いて多い。2曲の音楽聴取に種々の感動を最大限に感じ取っていたことがうかがえる。

楽曲Iでは、ほとんどの幼児が「興奮」と「歓喜」を選んでいる一方で、No.9の幼児は「享受」と「魅了」、No.10の幼児は「充溢」と「魅了」といった穏やかな種類の感動を認めており、この2名は「興奮」と「歓喜」は選択していない。

またNo.9の幼児は、「悲痛」に属する「ないちゃう」も選んでいるが、聴取後に「さいごになってとけいがこわれちゃったとおもった」と話していた。曲を楽しみながら聴き、いろいろな想像を膨らませている。

また、No.10の幼児は楽曲IIの聴取の際に、この楽曲の旋律が知覚能力に関する予備的な調査において模唱した旋律だということに気がついた。

5名の幼児がいずれかの楽曲で「ないちゃう」「ショック!」といった「悲痛」に属する言葉を選んでいる。特に楽曲IIでは、聴取した直後に「怖かった」と気持ちを伝えた幼児や、実際に泣いてしまった幼児もいたことから、この曲は幼児に強いインパクトを与えたと言える。

No.14の幼児は両曲ともに「ショック!」の言葉を選んでおり、音楽聴取に強烈な印象を受けたと考えられる。

IV. 総合考察と今後の課題

幼児の豊かな感性や表現力を養うためには、「聴く力」と「感受する力」を育むことが重要な要素の一つになるという視点に立って幼児の「聴く力」と「感受する力」を探り、考察を進めた。語彙力や自らの感情理解能力が発達途上にある幼児から感性という繊細な心の動きを推し量ることは推測の域を出ない部分もあり、判別が難しいことではあるが、幼児が理解できる言葉を評価語とした幼児のための音楽の印象評価尺度及び感動評価尺度

表8：楽曲Ⅰ（シンコペーテッドクロック）における実験参加者が選んだ言葉と貼ったシールの数

実験参加者#	うれしい	きれいだなあ	いいなあ	やったあ！	なんかよい	うわあ	すごい	びっくりした	ドキドキ	わーい！	ないちゃう	シヨック！	さびしい	合計シールの数	たし言葉の数を貼った
No.1							1	3	1					5	3
No.2	1		1			1	1	1		1				6	6
No.3	3							2						5	2
No.4	3		2											5	2
No.5	3													3	1
No.6	2	3				2	3							10	4
No.7	3	1	3		3		2		3					15	6
No.8							1	1				1	1	4	4
No.9		2			2						1			5	3
No.10		1	1											2	2
No.11					2			1						3	2
No.12			3				3							6	2
No.13	1	3					1			3				8	4
No.14					1		1					1		3	3

表9：楽曲Ⅱ（ライオンの大行進）における実験参加者が選んだ言葉と貼ったシールの数

実験参加者#	うれしい	きれいだなあ	いいなあ	やったあ！	なんかよい	うわあ	すごい	びっくりした	ドキドキ	わーい！	ないちゃう	シヨック！	さびしい	合計シールの数	たし言葉の数を貼った
No.1	1			3				1	1		1			7	5
No.2	1		1	1			1							4	4
No.3	1			1	1		1	1	1	1		1		8	8
No.4						1	3		2					6	3
No.5								2						2	1
No.6	3							2						5	2
No.7	3	2	3		2		3		2					15	6
No.8						1	1	1	1		1			5	5
No.9					2		2							4	2
No.10							2	3	1					6	3
No.11								3						3	1
No.12								3						3	1
No.13	1	3					3	3						10	4
No.14						1						3		4	2

と、幼児のための音楽の印象評価回答シート及び感動評価回答シートを作成し、音楽聴取において幼児が感受した心の動きの質と量を具体化するアプローチを試みた。

この調査に先立って行った聴く力の基礎的な部分であるリズムと旋律知覚の調査では、従来の研究結果の通り、3～4音からなるリズムは100%の幼児が同期を可能とし、7～8音においても高い正答率を得た。旋律知覚も同様である。2曲の楽曲聴取の調査においては、調査対象者たちはそれぞれの曲の曲想の違いを捉えることができていた。曲中に起こる変化にも気づき、身近にある楽器や動物など、自分の知っている情報と重ね合わせて楽しんで聴いていた。今回の調査の結果からは、幼児の感性は「興奮」「歓喜」「覚醒」といった外に表されるような表出的な感動に傾く傾向が見られた。但し、聴取で用いた楽曲が2曲に留まったこともあり、この点に関しては今後、テンポ、調、楽器編成等を考慮し、曲想が異なる複数曲の聴取調査を重ねる必要があると思われる。

2曲の聴取で幼児の多くが音楽の印象評価尺度において「高揚」と評価した楽曲では、感動評価尺度による評価では幼児の多くは共通して「興奮」「歓喜」の感動を喚起しており、関連性が見られるが、「高揚」と「興奮」「歓喜」以外の関連性に関しては、音楽の印象評価尺度と感動評価尺度の評価は楽曲によって様々で、異なる楽曲を聴くことで多様な感動を得る。このことから、多種多様な楽曲の聴取経験することは幼児に豊かな感受性を喚起させ、豊かな感性を導く一要因と成り得ると考えられる。

幼児が感受した感動の質と量はそれぞれで、多様な種類の感動で聴いた幼児もいれば、質の種類は少なくとも量の点では多さを示す幼児もいた。各々が感受した感動の質は一樣ではなく、「興奮」「歓喜」「覚醒」といった感動を中核として「魅了」「享受」「充溢」といった比較的穏やかな感動を得たことを認めている幼児もいた。

感受した感動の量を判別することは幼児にとっては難しく、可能であっても2値(多い/少ない)であり、この点に関しては今後調査方法を検討する必要がある。

また今回の調査に使用した提示刺激の写真と音源には、インターネット上からダウンロードしたものがあるが、管理や著作権上の問題を考えた時、書籍やCDから用意することがより妥当であると見えるかもしれない。

今回の調査では、参加した幼児のほぼ14名全員が途中で飽きることも集中力を失うこともなく、楽しみと喜びの表情を持って回答してくれた。調査結果からは、音楽鑑賞においては、幼児1人1人がそれぞれの「聴く力」と「感受する力」で音楽を聴き、それぞれの感性が発揮されることが示された。保育の現場においては、音楽を鑑賞する時間を積極的に取り入れ、良い音楽に意識的に耳を傾ける取り組みを充実させることを期待したい。音楽鑑賞の活動の積み重ねは、幼児の豊かに聴く、感受する力を育み、豊かな感性、豊かな表現力へ導く有効なものとなり得ると考える。

文献

- (1) 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領解説。フレーベル館。233
- (2) 鈴木裕子(2009) 幼児の感性を具体化する試み—幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして—。保育学研究, 47(2). 135
- (3) Trehub, S. E. & Thorpe, L. A. (1989) Infants' perception of rhythm: Categorization of auditory sequences by temporal structure. *Canadian Journal of Psychology*, 43, 217-229
- (4) 南曜子、二藤宏美(1998) 乳児のテンポに対する反応—3～5ヵ月児を対象として—。愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 創刊号。169-176
- (5) Saffran, J. R., Loman, M. M. & Robertson, R. (2000) Infant memory for musical experiences. *Cognition*, 77(1), B15-23
- (6) 二藤宏美(2005) 乳児の旋律聴取研究。ベビーサイエンス, 4.
- (7) Kastner, M. P. & Crowder, R. G. (1990) Perception of the Major/Minor Distinction: IV. Emotional Connotations in Young Children. *Music Perception: An Interdisciplinary Journal*, 8(2), 189-201
- (8) 柿本因子(1990) 幼児の音楽能力に関する研究(1)。比治山女子短期大学紀要, 24. 85-95
- (9) 岩田祺子(2011) 幼児における音楽と感情との関連(3)—日本と中国の幼児の、音楽における感情の理解について—。相愛大学人間発達学研究, 2. 27-36

- (10) 中村千晶 (2016) 幼児の音楽聴取についての一考察。教育学論究, 8. 127-134
- (11) 立本千寿子 (2011) 幼児の音の聴取・表現力と行動特性—「聴く・つくる」活動を通してみる幼児像—。教育実践学論集, 12. 114
- (12) Zee, N. V. (1976) Responses of Kindergarten Children to Musical Stimuli and Terminology. *Research in Music Education*, 24 (1), 14-21
- (13) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編. 20-28
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf (情報取得 2019/10/20)
- (14) 小原光一、飯沼信義、浦田健次郎 (監修) (2017) 小学生のおんがく 1。教育芸術社。
- (15) 前掲 (1). 90-93
- (16) 原田昭 (2002) 感性とひらめきの解明に向けて。日本学術会議「人間と工学の接点」シンポジウム論文集, 25-32
- (17) 前掲 (14). 44-45
- (18) 菊池哲平 (2004) 幼児における自分自身の表情に対する理解の発達的变化。発達心理学研究, 15 (2). 210
- (19) 戸田須恵子 (2003) 幼児の他者理解と向社会行動との関係について。釧路論集, 35. 98
- (20) 櫻庭京子、今泉敏 (2001) 2～4 歳児における情動語の理解と表情認知能力の発達の比較。発達心理学研究, 12 (1). 39
- (21) 前掲 (9). 29
- (22) 大出訓史、今井篤、安藤彰男、谷口高士 (2009) 音楽聴取における“感動”の評価要因—感動の種類と音楽の感情価の関係。情報処理学会論文誌, 50 (3). 1111-1121
- (23) 前掲 (14). 44-45
- (24) ライオンの写真。 <https://search.creativecommons.org/search?q=lion> (情報取得 2019/10/20)
- (25) Kozo Hayashi. (2015) シンコペーテッドクロック。Youtube. <<https://youtu.be/Y79P1tHAdZc>> (情報取得 2019/10/27)
- (26) ClassicalMusicE. (2013) サン＝サーンス：組曲「動物の謝肉祭」より第 1 曲『序奏と獅子王の行進曲』。Youtube. <<https://www.youtube.com/watch?v=zEo9cWo1nok>> (情報取得 2019/10/27)

